特集2

第88回箱根駅伝

ボランティアで伝統を支える『中央大学箱根駅伝を強くする会』

いまや、正月の一大イベントとなった箱根駅伝。史上最多14回の総合優勝を誇る中央大学は、1月2、3両日に行われた第88回箱根駅伝で総合8位と28年連続でシード権を確保した。この伝統を陰で支えているのが「中央大学箱根駅伝を強くする会」だ。ボランティアで支援する「強くする会」の熱き中大駅伝ファンを2日間、箱根路に追った。

学生記者取材班

【1月2日朝　東京・丸の内】

「中央大学箱根駅伝を強くする会」（以下、強くする会）は毎年、バス1台をチャーター、箱根に1泊して東京・大手町―箱根・芦ノ湖間の往復路を応援している。ことし参加したのは、19人（学生記者を含む）。いずれも熱烈な中大駅伝ファンだ。

1月2日午前6時半、東京駅に近い中大応援場所の郵船ビル前にはすでにバスが到着し、「強くする会」の**上岡君義**会長（昭和29年法学部卒）はじめ、会員らが幟（のぼり）を組み立てるなど応援の準備を始めていた。

上岡君義会長

厳しくなるホテルと駐車場確保

そんななかで早くも忙しく立ち回っていたのは、「強くする会」事務局長の**朝倉博**さん（昭和39年経済学部卒）だ。この日、朝倉さんは午前3時半に東京・世田谷の自宅を出た。5時に東京・錦糸町にある「強くする会」事務所に立ち寄り、参加者に配る資料や幟、小旗などの応援資材をバスに積み込んで、大手町に駆けつけた。

朝倉博事務局長

「ここまでの準備が大変なんです」と朝倉さん。参加者に配る資料は中大スポーツ、応援パンフレット、箱根駅伝ガイドブックなど数多い。事前の準備も大変で、数ヶ月前から

対応に追われる。参加者が1泊するホテルの予約から、箱根でのバス駐車場の確保、それに2日の昼食、3日の朝食のおにぎりの手配など一切を一手に担っている。

「手伝ってくれる人もいますが、準備に追われます。箱根駅伝はますます盛んになってきて、とくに箱根はすごい人や車で、泊まるホテルやバスの駐車場の確保が年々厳しくなっています」と高まる一方の駅伝フィーバーに、朝倉さんの大変さも増している。

◇ ― ◇ ― ◇

「強くする会」は、中央大学の駅伝チームを物心両面から援助し、優勝を目指すことを目的に、1988年（昭和63年）に設立された。現在、会員は約1200人（名簿上）。年会費は5000円。

毎年11月に総会を開き、あわせて選手激励会を行っている。正月の箱根駅伝には箱根一泊応援をはじめ会員参加による応援活動を実施。4月には新入生選手の歓迎会を開催。また夏の北海道・弟子屈町、長野・菅平の合宿をはじめ、合宿先を訪ねては選手を激励している。

このほか選手強化協力費や育英奨学金など、資金的な支援も行っている。

◇ ― ◇ ― ◇

箱根駅伝は青春そのもの

午前8時の往路スタートまで1時間を切ろうとしていたとき、応援場所に姿をみせた**福原紀彦**総長・学長に話を伺うことができた。「駅伝は中央大学の1年のはじまりです。駅伝を応援することで中大のアイデンティティを感じることができます。駅伝の観戦を通じて全国の人に中大の伝統を知ってほしい」と強調された。

午前7時、応援団の応援がはじまった。すでに周囲は車道に溢れるぐらいの中大ファンで埋まっている。そのなかに何人もの応援団OBの顔があった。そのひとりで、千葉・我孫子市から駆け付けた**小塚正人**さん（昭和43年商学部卒）は「箱根駅伝は青春そのもの。毎年、箱根駅伝を応援するのが生きがいになっている」と声を張り上げる。

「駅伝は１年のはじまり」と語る福原紀彦総長・学長

また、ひときわ大きな声で応援歌を歌っていたのは、昨年、応援団副団長だった**清澤要**さん（平成23年法学部卒）。現在は航空自衛隊・奈良基地で厳しい訓練の毎日をおくる清澤さんは、実家の兵庫・神戸市から1日に上京し、2、3両日泊まりがけで応援するという。

小塚正人さん

「箱根は1年で最大の楽しみ。早く優勝してほしい」と期待を募らせる。

午前8時、第1区の選手が大手町・読売新聞社前を一斉にスタートした。数分後、選手がひと固まりになって

郵政ビル前を一瞬で走り去った。応援団長の「応援ありがとうございました。これからもお願いします」との挨拶を合図に、「強くする会」のメンバーは幟を撤収して待機していたバスに乗り込んだ。バスは午前8時20分、一路、箱根に向かった。

【往路バス車中】

1に商売、2に箱根、3に家族

「おはようございます」。箱根に向かうバス車内で参加者に、まず挨拶したのは、「強くする会」幹事長の**中村重郎**さん（昭和34年経済学部卒）。自分の会社の事務所を「強くする会」の事務所に提供している中村さんは、「1に商売、2に箱根、3に家族」と言い切るほど、数十年来、母校・中大の駅伝を支援してきている。

中村重郎幹事長

「選手たちが楽しく頑張ってくれれば良い。そのために、私たちができることはします」という中村さんは、もちろん優勝に期待を寄せてはいるが、「選手たちの人間性が大きくなってほしい」とわが子を見守るような気持ちで応援している。

バスでの箱根1泊応援の参加者は常連が多いが、そのなかに今回がはじめての参加という人がいた。**堤攻**さん（昭和43年法学部卒）で、「バスでの応援は初めてだけど、箱根駅伝の応援は40年以上続けています」という熱血ファンだ。

堤攻さん

「箱根の応援は生きがい。中大が出る大会は全部応援に行く。おっかけだね」と笑う堤さんは、国立競技場での関東インカレをはじめ、八王子市や埼玉・飯能市で行われる駅伝や立川市でのハーフマラソンの応援にも足を運ぶ。

なぜそこまで熱心に応援をするのか聞いてみると、「中大の卒業生は箱根に対する思いが他大には考えられないほど違うんです。中大にとって箱根は特別なもので、中大の絆を感じる」と言って頷く。

遠くから、馳せ参じた人もいる。**吉田敏彦**さん（昭和39年法学部卒）は岩手・盛岡市から参加した。「この10年間で7回、岩手から箱根の応援に来ている」という吉田さんは、「中大の売りといえば、箱根駅伝です。より強くなるためには、大学全体のバックアップ態勢の整備がかかせません」と力を込めて語る。

吉田敏彦さん

最多14回総合優勝の誇り

バスが東名高速道路の平塚インターチェンジでの小休憩後、小田原を過ぎ、徐々に箱根の山道に入り出すと、電波の関係でバス車内に設置されたテレビの映りが悪くなってきた。それでも車内は駅伝トークで盛り上がっている。「早稲田にだけは優勝させたくない。総合優勝の回数が中大に並んでしまうからなぁ～」との声に、「そうだ」と参加者が口ぐちに相槌を打つ。

テレビ映像からの情報が取りにくくなってきたなかで、「小田原中継所で中大は6位で襷を渡した。これからだ。いけるぞ」とひときわ元気な声で車内に情報を伝えるのは、**清**

水康弘さん（昭和38年経済学部卒）。清水さんの携帯電話に、自宅でテレビ応援している友達から、その都度連絡が入っているのだ。「大学在学中からの友達ではなくて、強くする会での交流で新しくできた友達なんです」と語る清水さんは、強くする会を通した人とのつながりの広がりに、中大の絆を感じている。

清水康弘さん

昨年に続いて今年が2回目の参加になるという**松田清治**さん（平成21年法学部通信教育課程卒）は、「連続出場83回の伝統の力で上位進出を果たしてほしい」と古豪・中大の底力に期待を寄せる。その一方で、「強い他の大学をみていると、中大にも全国的に注目される選手がもっと入って来てほしい」とチーム力のアップを願う。

松田清治さん

「もっと選手の身近で応援したい」という思いから強くする会に入ったというのは、**平山正浩**さん（昭和60年商学部卒）。「中大には誰かがブレーキになっても全員でカバーしようという気持ちがあるし、それだけの力がある」と順位を下げつつある5区の状況を気にしながら、力強く語る。

平山正浩さん

【箱根恩賜公園・往路ゴール前】

バスは午前11時30分ごろ、箱根・芦ノ湖の往路ゴール付近に到着。5区の選手が来るまでには、まだ2時間ほどある。強くする会のメンバーはバスを降りて、中大の指定応援場所の県立箱根恩賜公園駐車場まで幟と小旗を持って歩く。その途中、通りすがりの乗用車の窓があいて、「中大を応援するので小旗を下さい」と手を伸ばす人に、「お願いします。しっかり応援してください」と言って小旗を手渡す。中大の小旗は箱根駅伝ファンに大人気だ。

小旗1000本を沿道支部に配布

◇ ― ◇ ― ◇

白地に赤で「中央大学」と染め抜いた幟は、「強くする会」が作成している。駅伝ファンに人気の小旗もまた「強くする会」が作成、正月の箱根駅伝に備え、年末中に川崎、横浜、平塚、小田原など沿道の学員会地域支部に合わせて約1000本を配っている。

◇ ― ◇ ― ◇

応援場所に集まった中大関係者のなかに、5区を走る主将の井口恵太選手（経済学部4年）のお母さん、**井口久美子**さんの姿があった。静岡・浜松市から近所の人たち20人程とともに応援に来たという井口さんは、「走らせていただける感謝の気持ちを忘れずに、チームに少しでも貢献できるように走ります」と井口選手の気持ちを伝えてくれた。

午後1時半すぎ、中大は復路12位でゴール。その結果に中大応援者からは「明日の復路6区は繰り上げ一斉スタートになる。中大が復路一斉スタートするのは26年ぶりだ」と落胆した声が聞かれる一方で、強くする会のメンバーの多くが「復路には良い選手が残っているから大丈夫だ」と巻き返しに期待を込める。

往路終了後、芦ノ湖畔の箱根駅伝

記念碑前で行われた報告会に、5区の山登りを走った井口選手が同僚の選手に肩を支えられて出席した。両足がまだけいれんしていて、両脇を支えられないと自力で立てない。その精根使い果たした井口選手の姿に、「強くする会」のメンバーからは「よく頑張った。襷をつなげたことが何よりだ」と温かい声援が飛んだ。

【夕食会・小田原市内】

和気あいあいと駅伝トーク

「強くする会」の参加者は午後3時すぎ、再びバスに乗り、箱根芦ノ湖から小田原市内のホテルに向かった。いったんホテルで小休止したあと、夕食会が小田原市内にある料理屋で行われた。

白門小田原支部の方々も加わり、夕食会は新年のお祝いをしながら和やかに始まった。駅伝トークはもちろん近況報告や学生時代の話などで盛り上がる。往路12位という結果に、バスでの一泊応援に参加した**須藤菊乃**さんは「あすの復路に期待します。往路の結果を見て、一年間の練習の成果を本番で出すのはなかなか大変だな、と感じました」と語る。

後藤菊乃さん

駅伝選手の激励に夏の菅平合宿にも駆け付けているという須藤さんは、中大出身の経済人による交流会である『南甲倶楽部』の事務職員で、バスでの箱根一泊応援歴9年という常連者だ。

榛葉央男さん（昭和47年経済学部卒）は、「中大の駅伝がかつてのような勢いを取り戻すには、他大のようにお金をかける必要がある」と断言する。ただ、陸上競技部の東豊田寮ができたことで、「その成果が出てくると思う」と今後に期待している。

榛葉央男さん

【1月3日朝　元箱根】

強くする会参加者の朝は早い。まだ夜が明けない3日午前5時、ホテルを出てバスに乗り込み、小田原市から復路スタート地点の箱根芦ノ湖に向かう。朝ご飯は、バス車内でおにぎりを食べる。これは2日の夕食後、事務局長の朝倉さんが近くのコンビニで調達してくれたものだ。

午前6時前には芦ノ湖湖畔に着き、そこから歩いて応援場所の県立箱根恩賜公園に向かうが、まだ復路スタート2時間前というのに早くも沿道には駅伝ファンが応援場所を確保している。強くする会のメンバーも幟を立てて、沿道に立ち並び、応援の準備をする。

早朝の箱根はさすがに底冷えするが、人出が増えるにしたがって、周囲に熱気がみなぎってくる。午前7時10分、中大の応援が始まり校歌や応援歌が響く。

午前8時、復路スタート。遅れて中大は13校と集団で繰り上げ一斉スタートした。「代田頑張れ！」と声を張り上げて、6区の代田修平選手（経済学部2年）に声援を送ったあと、強くする会のメンバーはバスに乗り込み、今度は復路ゴールの東京・大手町に向かった。

【復路バス車中】

中大6連覇時代から応援

バス車内では、快調に山を下る代田選手に「いいぞ。区間賞を狙えるぞ」と期待の声があがる。順位を上

げ、8位競争に加わると「行け行け～、頑張れ」と声援と手拍子が起こる。

バスの後部座席で穏やかな表情で応援している**源嶋智**さん（昭和41年文学部卒）に話を聞いた。バスでの一泊応援には10年来参加し続けているそうで、「箱根が来ないと正月が来ない」と箱根駅伝の応援は欠かせない新年行事になっている。

源嶋智さん

12月に京都で行われる高校駅伝にも毎年のように足を運び、高校の有望選手がどの大学に行くかをチェックしているほど、中大の応援に熱を入れる。「箱根で活躍した大学選手の多くは燃え尽きてしまう。中大の選手は文武両道なので、卒業して実業団に入っても伸びる」と源嶋さんは選手の将来をも見据えている。

ご夫妻で参加していたのは、**山口義夫**さん（昭和38年商学部卒）と**喜代子**さん。税理士の山口さんは強くする会の会計監事でもある。6，7年前に同期生に誘われて強くする会に入り、5，6年前からご夫妻で一泊応援に参加している。

山口義夫・喜代子ご夫婦

「僕らのころは中大が6連覇した時代です。勝負事はやはり勝たないといけません」と願うのは15年も遠ざかっている優勝だ。一泊応援に参加するのは「若い人と一緒に大声で校歌を歌うと若返る。それにテレビとは違う臨場感がありますからね」と答えてくれた。「箱根路の雰囲気がなんとも言えない」と喜代子さんも付け加える。

山口さんは「強くする会の会員には平成の卒業生がいないんです。働き盛りとはいえ30代40代の会員も少ない」と言って、「若い人たちもぜひ、会員になって駅伝を応援してほしい」と強くする会への加入を呼び掛けた。

〝皆勤賞〟のバス箱根一泊応援

バス箱根一泊応援のただ一人の〝皆勤賞〟とほかのメンバーが言うのは、**矢原正**さん（昭和41年理工学部卒）だ。中央大学の6連覇がきっかけで熱烈なファンになったという矢原さんにとって、毎年のバスツアーでの応援は正月の年中行事になっている。長年応援してきていて、「近年は高校の有望選手の獲得をはじめ、政策的に力を入れている大学が多いなかで、中央大学も本腰を入れないと取り残されるだろう」という危機感を持っている一人だ。

矢原正さん

「中央大学の文武両道とは司法試験の高合格率、箱根駅伝の活躍が柱です」と強調するのは**佐藤勝**さん（昭和43年法学部卒）。母校への熱い思いから、強くする会に入ったという

佐藤勝さん

佐藤さんは、「いまは自分のことだけを考える人が多いが、駅伝は襷をつないで、みんなのために自分の責任を懸命に果たそうとするのが魅力です」と強調する。

強くする会は毎年「箱根駅伝を強くする会ニュース」を作成・発行し、会員に配布しているが、それを担当する広報委員長が**石村靖雄**さん（昭和44年法学部卒）だ。ニュース取材のために、合宿はじめ、いろいろな行事には必ずといっていいほど参加している。「もちろん中大の優勝を願っています。でも、どの大学も優勝を狙っているので、巡り合わせがあるんじゃないかな」と復路での巻き返しに想いを馳せる。

石村靖雄さん

【昼食・上野精養軒】

バスは復路ゴールの大手町に向かう途中、早めの昼食をとるため上野精養軒に立ち寄った。食事をしながら、テレビ中継を見て、応援する。8―10位というシード権ボーダーラインの争いが続き、「シードは取れるのか」という不安の声と「後続とのタイム差があるから大丈夫だ」と安心する声が交錯する。

現役世代の新会員獲得が課題

そこで強くする会会長の上岡君義さんに話を伺うことができた。上岡さんは今年、体調と相談して箱根一泊応援のバス参加を見送ったが、ここで一行と合流した。

旧制中学時代に長距離の選手で、中央大学理事も務めた上岡さんが、副会長から会長に就いたのは平成22年4月。会長に就任してからは、役員も会員も高齢化が進んでいることに危機感を覚え、「学員会の地域や年次支部の会合に顔を出しては、若い人たちに入会してもらうように呼びかけています」という。

「箱根駅伝の優勝は大学の経営に大きく関係してきます」という上岡さんは、「箱根駅伝は国民的行事になっているため、優勝すると受験生が増えて、大学はより優秀な学生を入学させることができる。だから文武両道にもつながるんです」と強調する。

このため上岡さんは、駅伝の専任コーチをおくように大学側に申し入れているという。監督がコーチも兼任している中大の現状では、監督と専任コーチがいる他大との差が広がってしまうと懸念しているからだ。「大学の経営から考えても、箱根駅伝は重要です」と上岡さんは重ねて強調した。

◇ ― ◇ ― ◇

現在の「強くする会」会員約１２００人の年齢構成は、50～70歳代がほとんどで、昭和42年（１９６７年）以降に卒業した年代はきわめて少ない。会員は仕事をリタイアした人が大半で、高齢化が進む中、現役世代の新規会員の獲得が大きな課題になっている。地域的には全体の約8割が関東近県在住者だ。

中央大学は平成8年（１９９６年）の箱根駅伝で32年ぶり14回目の総合優勝を果たしたが、その年の中央大学の受験生は対前年比で1万人以上増え、箱根駅伝優勝の相乗効果とみられている。

◇ ― ◇ ― ◇

【日本橋・復路ゴール前】

3日12時前、東京・大手町のゴール付近は10区の選手を今か今かと待ちわびる観衆で溢れかえっていた。中央大学の応援場所である日本橋近くのＪＦＥ商事前も、身動きできないほどの人で膨れ上がってきた。

ラジオで中大の順位をチェックし、シード権確保はほぼ間違いないという情報が伝わると「もう大丈夫だ」と安堵した空気が広がる。

応援団の応援ぶりをかたわらから見つめていたのは、昨年の応援団長

だった石川弘樹さん（平成23年文学部卒）。社会人一年目の石川さんは、大晦日に実家に帰り、元旦を実家で過ごしたあと、2、3日両日、往復路を応援団の後輩達と行動を共にしてきた。「後輩達の成長を見たくて参加しましたが、また明日から仕事です」とわが身を振り返った。

熱心にカメラをかまえていたのは**邉田幸藏**さん（昭和41年法学部卒）。

邉田幸藏さん

昨年は箱根一泊応援に参加したが、都合で参加できなかった今年はゴールを見届けるために、午前4時に起きて、大手町に駆け付けたという。

「箱根駅伝の応援は、中大卒業生を感じることができる唯一のアイデンティティなんです。また、応援を機に人の輪が広がり、卒業年次を超えた交流ができることも楽しみの一つです」と語ってくれた。

【報告会・常盤橋公園】

公園を一杯に埋めた中大ファン

中大は総合8位で復路ゴール。28年連続でシード権を獲得した。日本橋・常盤橋公園での恒例の報告会で、久野修慈理事長は「中大の精神を守り、そして東北を応援する気持ちで走ってくれた選手の皆さんに感謝します」と挨拶。続いて福原紀彦総長・学長は「伝統の襷と絆を今年もつなぎ、底力を見せつけ、中大関係者に今年も頑張ろうという勇気を与えてくれた選手の皆さんに感謝します。次に襷をつなぐのは我々の番です。頑張りましょう」と集った大勢の中大ファンに感謝の意を表した。

陸上競技部の井上彰部長（法学部教授）は開口一番、「ご心配をおかけしました」と一言。「一時はどうなるかと思ったが、後半で挽回することができました。課題を克服して来年も頑張りたいと思います」と述べた。

浦田春生・駅伝監督は、「3位を目標に頑張ってきましたが、復路12位からのスタートで厳しかった。キャプテンの思いをみんなが受け継いだおかげで挽回できました。優勝には足りていませんが、選手も育ってきています。来年は今回のようなことがないよう頑張りたい」と誓った。

最後に応援団の長内了部長（法科大学院教授）が「ハラハラ、ドキドキの駅伝だった。これだけたくさんの人が応援に来る大学は他に例がありません。これからも応援に来てください」と公園を埋めた熱心な中大ファンに向かって声を張り上げた。

◇ ― ◇ ― ◇

強くする会の箱根一泊応援参加者は、報告会後、幟と小旗を片づけ、各自がバスに置いた荷物を取って、散会した。「また来年も会いましょう」と別れの挨拶をするなか、事務局長の朝倉さんはそのままバスで強くする会の事務所に向かった。メンバーが着ていた白地に赤の「C」マークが入ったジャンパーをクリーニングに出し、今回の諸費用や駅伝の結果などをまとめて、帰宅するのは午後10時ごろになるという。

朝倉さんは、多忙な二日間を振り返りながら、「やっぱりハコネが好きだからね」とホッとしたように笑った。

学生記者取材班

佐武祥子＝法学部3年／渡辺紗希＝法学部3年／野村有希＝経済学部2年